

那珂川市の指定文化財②

- | | |
|-----------|---|
| 1 名 称 | 安徳台遺跡 ^{あんとかだいせいせき} |
| 2 種 類・種 別 | 国指定・史跡 |
| 3 所 在 地 | 福岡県那珂川市大字安徳 416 番 2 外 206 筆 等 |
| 4 指 定 面 積 | 188,263.42 m ² (令和 3 年 4 月 1 日現在) |
| 5 指定年月日 | 平成 31 年 2 月 26 日・指定(文部科学省告示第 20 号)
令和 3 年 3 月 26 日・追加指定(文部科学省告示第 49 号) |
- 6 調査の概要【主な調査履歴と報告書】
- 平成 9 年度 台地上の遺跡の有無を調べるため、25 箇所で行ったグリッド調査を実施した。
- 平成 10 年度 約 3,000 m²を調査し、住居跡を 40 軒以上確認する。
- 平成 11 年度 5 箇所約 4,400 m²を調査し、弥生時代中期の住居跡 35 軒と戦国時代の居館跡を確認した。
- 平成 12 年度 9 箇所約 3,900 m²を調査した。弥生時代中期の住居跡 28 軒を確認した。古代の大型の建物跡、中世の墓地を 1 棟検出した。
- 平成 13 年度 3 箇所約 3,200 m²を調査した。弥生時代中期中葉の約 15m の住居跡をはじめとして 25 軒、古代の建物跡 2 棟も検出した。
- 平成 14 年度 8 箇所約 3,600 m²を調査した。弥生時代中期前葉の住居跡、祭祀土壇、弥生時代中期後葉の住居跡、古代の建物 1 棟を検出し、今回初めて弥生時代中期後葉の甕棺墓群を確認した。
- 平成 15 年度 甕棺墓群の約 200 m²を調査した。文化財調査研究指導委員会を開催した。合計 10 基の甕棺墓を確認し、内 8 基を調査した。2 基からゴホウラ貝製腕輪、ガラス製品(管玉、勾玉、塞杆状製品^{さいかんじょうせいひん})等の貴重な副葬品^{ふくそうひん}が出土した。
- 平成 16 年度 発掘された日本列島展へ出展する。
- 平成 17 年度 図面・遺物整理を行い、報告書を刊行した。
- 平成 18 年度 調査研究指導委員会を開催した。遺跡の性格をさらに解明するために、確認調査の再実施の指導を受けた。
- 平成 20 年度 レーダー探査及び探査成果の検証を実施した。レーダー探査は(独)奈良文化財研究所物理探査研究室に依頼し、4 地点 11,633 m²で実施した。その後、検証のための確認調査を実施した。
- 平成 21 年度 レーダー探査及び探査検証、台地の西に続く道場山、甕棺墓推定地、銅矛出土推定地の調査を実施した。レーダー探査は(独)九州大学工学部水永研究室に依頼し、3 箇所 4,669 m²で実施した。確認調査はレーダー探査地 2 ヶ所、銅矛出土推定地、他 2 ヶ所で実施した。弥生時代中期前葉と中葉の墓域を確認した。
- 平成 22 年度 文化財調査研究指導委員会を開催し、平成 21・22 年度に実施した確認調査の図面及び遺物の整理を行い、レーダー探査結果報告を含めた報告書を刊行し

た。また、文化財調査研究指導委員会で最終的な遺跡の価値の検証を行い、委員会意見として、意見具申を教育長へ提出した。

これまでの発掘調査報告書については、以下のとおりである。

那珂川町教育委員会『安徳台遺跡群』那珂川町文化財調査報告書第 67 集 2006

那珂川町教育委員会『安徳台遺跡群』那珂川町文化財調査報告書第 67 集付編 2006

那珂川町教育委員会『安徳台遺跡群Ⅱ』那珂川町文化財調査報告書第 79 集 2010

那珂川町教育委員会『安徳台遺跡群Ⅲ』那珂川町文化財調査報告書第 83 集 2014

7 遺跡の概要と学術的評価

本遺跡での発掘調査は平成 9 年度から行われ、調査の結果、弥生時代の集落と墳墓、7 世紀代の大型建物、室町時代の居館と墳墓が確認されている。

その内、弥生時代の集落と墳墓について、これまでの調査で 130 軒を超える住居跡が見つかっている。時期を把握したのは中期前葉 10 軒(円形 1 軒、長方形 3 軒、方形 5 軒、不明 1 軒)、中期中葉 9 軒(円形 2 軒、長方形 1 軒、方形 5 軒、不明 1 軒)、中期後葉 9 軒(円形 4 軒、長方形 1 軒、方形 4 軒)、後期初頭 5 軒(円形 2 軒、方形 3 軒)の合計 33 軒で、これらの分布は中期前葉が台地の西半に広く認められ、中期中葉が北半中央にあたるウソ谷と呼ばれる谷部を取り巻くように見つかる。中期後葉は東半部へ移り、後期初頭は北半のウソ谷西側に集中し範囲が狭まる。また、各時期に共通するのは 10m 前後の大型住居が存在することで、中期中葉が方形 3 軒、中期中葉が円形 1 軒、中期後葉が円形 4 軒、後期初頭が円形 2 軒である。墳墓についても中期前葉、中葉、後葉の甕棺墓群を確認している。中期前葉の墓域は台地北辺中央付近から平野へ突き出す長さ約 120m、幅約 10m の狭長な尾根上に、中期中葉の墓域は中期前葉の南側に、中期後葉の墓域は尾根西側のウソ谷を挟み、東方へ方形に張り出す台地上で見つかった。これまでの発掘調査の結果から、福岡平野で唯一中期を通じた集落及び墓域の変遷が追える重要な遺跡であることが判明した。

奴国において比恵・那珂遺跡群と須玖岡本遺跡一帯は王都として認識されている。その周辺には多くの弥生時代の集落が存在するが、本遺跡で見つかった大型住居跡、大陸や半島色の強い出土遺物、甕棺墓と豪華な副葬品は本遺跡が奴国の中でも有力な人物が治めていた拠点集落であることを示している。さらに、弥生時代の地形をほぼそのまま留め、中期から後期初頭まで綿々と営まれる集落や墳墓がセットで見られる遺跡であることも特筆される。同様の遺跡は福岡市吉武高木遺跡や神埼郡吉野ヶ里町吉野ヶ里遺跡など数少なく、現在のところ奴国にはない。弥生時代中期における奴国内の拠点集落の変遷を追うことができる数少ない遺跡であり、社会構造を解明できる唯一の遺跡である。以上のことから、本遺跡は弥生時代中期の集落及び墓域の変遷を追える貴重な遺跡であり、弥生時代の階層や社会構造を検証し、弥生時代の歴史を解明するうえで、欠くことのできない遺跡である。開発により多くの遺跡が姿を消していくなか、弥生時代の原風景を良く残す、福岡平野で唯一の遺跡であり、継続した遺跡の保護が必要である。